

地域と連携した基礎看護実習の成果

吉川 洋子・曾田 陽子・長崎 雅子・木村 幸弘

概 要

島根県立看護短期大学看護学科では、初めての看護実習となる基礎看護実習Ⅰにおいて地域の家庭を訪問する実習を行なっている。本研究では1998年以降の5年間に学生及び訪問対象者に対して行なったアンケート調査をもとに、本実習の成果を明らかにした。その結果、1. 学生、訪問対象者共に実習への満足度は高かった。2. 学生は実習目標に加え、人生観、生活の知恵、社会生活上の常識などを学び、以後の学習の動機づけになっていた。3. 訪問対象者は看護教育へ参加することを通して、社会貢献の喜び、生活への刺激、若者への親近感や理解への助けを得ていた。4. 実習報告会は、学生、訪問対象者ともに実習の成果を促進させていた、ということが明らかになり、基礎看護実習における地域の教育力の活用の有効性が示唆された。

キーワード：基礎看護実習、実習成果、家庭訪問実習、地域との連携、地域の教育力

I. はじめに

島根県立看護短期大学看護学科では、1995年の開学以来、「基礎看護実習Ⅰ」において地域の家庭を訪問する実習を行なってきた。これまでに我々は、その成果を学生が捉える対象像の分析などから捉えてきた^{1), 2)}。

看護実習に家庭訪問実習を取り入れている報告はあるが、この実習形態を本学のように基礎看護実習のはじめに位置づけているところは少ない。また実習の実施時期に加え、異世代の地域住民の協力体制のもとで実習が行なわれることも本実習の特色といえよう。

我々はこの実習の実施経緯と現状をここにまとめ、地域住民との連携によって行なわれる実習の成果を明らかにする。

II. 「基礎看護実習Ⅰ」の概要

本実習は、看護学科1年次後期に行なうもので、学生にとっては最初の看護実習となる(図1参

照)。実習は地域で生活している人を対象とし、継続的に訪問する。そして、既に学習した観察とコミュニケーション技術を活用して訪問対象者の全体像を理解するとともに、訪問を通して関心・興味を持ったことをグループで主体的に討論し、報告会で発表する(表1参照)。

1. 実習の特色

本実習の特色としては以下の3点が挙げられる。

1) 看護教育の早期に位置づけたこと

(1) early exposureとして、看護の対象者で

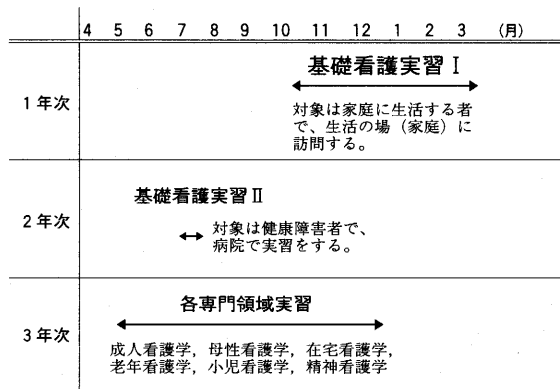


図1 実習進度

表1 基礎看護実習Ⅰの概略

実習名	「基礎看護実習Ⅰ」(1単位 45時間, 1年次後期10月～2月に実施)
目的	看護の対象者を生活している人としてとらえ, 統合的に理解するための基礎的能力を養う。
実習展開	
1. 実習方法	訪問対象者の選択は, 地区のコミュニティーセンターに依頼している。訪問対象者の殆どは高齢者であり, 学生は2人一組でその家庭に訪問する。訪問に当たっては, 電話などで訪問対象者と連絡をとり, 日程調整を行う。教員から事前・事後指導を受ける。
2. 指導方法	基礎看護学担当の5名の教員が学生を分担して指導する。教員は訪問には同行せず, 訪問前に学生が提出する記録(訪問の目標, 訪問に向けての準備・質問事項), および, 訪問後の記録(情報とその解釈・分析, 感想)を通して指導する。
3. 実習プログラム	<p>a. オリエンテーション 訪問する地域の歴史, 特性, 実習の目的・目標, 方法, 実習の展開, 評価, 注意事項。</p> <p>b. 4回家庭訪問 観察, コミュニケーション技術を活用してよい人間関係を築き, 訪問対象者を多角的にとらえるために意図的な情報収集を行い, 情報の整理・分析を行う(1回の訪問は2時間程度で, 一月に1回の割合で訪問する)。</p> <p>c. カンファレンス 1回目のカンファレンスでは, 初回訪問で困ったこと, 疑問点を討議して次の訪問に役立てる。2回目のカンファレンスでは, 訪問を通して関心を持ったこと, 疑問点を追求し, グループで報告会の発表テーマを決める。3回目のカンファレンスでは, 報告会の発表準備を行う。</p> <p>d. 訪問対象者の『全体像』のまとめ 4回の訪問を通して, 訪問対象者の健康を生活との関係でアセスメントし, 身体面・心理面・社会面を統合した全体像を学生個々人がまとめる。</p> <p>e. 報告会 訪問を通して関心を持ったこと, 疑問点を追求し, 看護への視野を広げる。また, 地域住民参加により, 社会の声を看護教育に反映する。</p>

ある人への興味・関心を高め, 看護への動機づけをはかる。

- (2) 年代の違う人とのふれ合いにより, 学生が自己の課題を早期に発見し, 主体的に学習活動する機会とする。

2) 実習の場を病院ではなく家庭としたこと

- (1) 病院では身体面に注意が向き, 人を身体・心理・社会的統合体として理解することが難しい。

- (2) 看護の対象者の生活をイメージしにくい
ため, 生活の本拠地に出向いて理解する。

3) 対象者を家庭で生活する人としたこと

- (1) 健康者は生活空間が広くさまざまな側面から生活が理解でき, 身体・心理・社会面の関連性が理解しやすい。

- (2) 学生は看護教育の早期にあり, 既習の観察, コミュニケーション, 記録の技術を主として用い, ふれ合いを通して対象者の生活を知る。

2. 実施体制(表2参照)

1) 実習対象者の選定

コミュニティーセンター長に実習の目的, 目標, 方法について説明を行い, 実習対象者選定の協力を依頼している。実習時間が平日の午後であるため, この地区において, この時間帯に訪問を受けることができる対象は主として高齢

者である。そこで実際的な実習対象者の選定は, センター長から老人会(慶人会)に依頼され, 会のネットワークを通じて, 毎年約40軒の対象者を決定する。実習終了後に次年度の協力の意志を問うが, 約8割は引き続き訪問を受け入れている。約2割は健康上の理由などから次年度の訪問を辞退するので, 会を通じて再募集を行い, 補充している。

2) 指導体制

1年次生約80名に対して, 実習指導は基礎看護学の教員3名と助手2名が指導にあたる。

学生が訪問する家庭に, 学長名による実習依頼書を作成し, 実習を指導する教員が実習依頼文書を持って各家庭を訪問し, 実習の目的, 方法を説明する。教員は訪問を通して, 訪問対象者の現在の生活概要等についての理解に努める。学生には実習開始3週間前にオリエンテーションを実施する。その際, 訪問地域の歴史・文化・風土等についてコミュニティーセンター長から説明を受ける。学生はその後, 訪問先の場所の確認, および, 実習内容について担当教員との間で意見交換を行い, 一月に1回の割合で2時間程度の訪問を合計4回行う。なお4回とも同一対象を訪問する。1回目の訪問終了後には, 指導教員毎にカンファレンスを行い, 学生の抱えている問題の解決に取り組んでいる。実習終了

表2 実施体制

コミュニティーセンター・センター長	老人会・老人会役員	学生	基礎看護学教員	その他の教職員
老人会との連絡・調整 訪問地域の歴史・文化・風土等の説明	訪問対象者の募集、選定、依頼訪問受け入れ(1回/月×4回)	訪問前学習(対象の理解の視点の明確化)、訪問後学習(情報の整理、アセスメント、次回訪問の準備)訪問(1回/月×4回)	実習指導 コミュニティーセンター、老人会、対象者との連絡調整	報告会への協力
報告会への参加	報告会への参加	カンファレンス報告会	カンファレンス、報告会。学生、対象者からの実習評価及び感想の集約	報告会

後は、学生、学内関係者及び訪問対象者も参加し、学生の実習成果を発表し意見交換を行う報告会及び交流会を、大学内において行っている。

3) 訪問対象者との連携

訪問対象者からの実習に関する質問・要望等は、随時、直接担当教員に尋ねるか、コミュニティーセンターを通して担当教員に伝えられるようにしている。また実習前の教員による家庭訪問を始め、実習報告会への招待、実習終了後の学生の感想文の郵送、年度始めに往復はがきによる実習協力についての意志の確認、実習終了後にアンケートによる対象者の反応の把握など、訪問対象者の声の吸い上げや疑問への対応、実習の成果を伝えている。

なお、本実習において、学生が訪問する訪問先に対しては、謝金に値する実習費などは一切ない。実習オリエンテーションにおいて、訪問地域の歴史・文化・風土等の説明を依頼した人に対して謝礼金を支払うだけである。よって本実習は大学がある地域のコミュニティーセンター、及び住民の全面的な協力・支援によって成立している。

以上のように本実習は実施されている。開学から3年間は、同様の内容で病院患者を対象とした実習も併せて行なっていたが、カリキュラム改正に伴い、1998年からは地域の家庭訪問に絞って実施してきている。また同年からは訪問対象者に報告会に参加してもらい、地域住民の声を直接教育に反映させる努力をしてきた。

Ⅲ. 研究目的

基礎看護実習Ⅰの実習成果を明らかにする。

Ⅳ. 研究方法

1. 方法

実習及び報告会終了時に行なうアンケート調査および実習感想文から得られる量的・質的データを分析する。

学生向けアンケートは、実習の満足度、看護への関心などについて5段階評定尺度で尋ねる項目と、全体的な感想などの自由記載の項目からなる。

訪問対象者向けアンケートは、訪問を受けて良かった点、良くなかった点など選択肢から選ぶ項目と、訪問を受けた感想などの自由記載の項目からなる。また、報告会への参加者に対しては、参加の感想や意見等について尋ねた。

2. 研究対象

1998年～2002年の基礎看護実習Ⅰ履修学生および訪問対象者

3. 倫理的配慮

学生：アンケートの目的は口頭と書面で説明し、成績評価に影響しないことを保証した。回答は無記名自記式とし、回収箱を一定期間設置して回収し、秘匿と参加の自由意志を尊重した。実習感想文は、実習対象者配布用に無記名かつ対象者が特定されないように配慮して作成されたものを使用した。

訪問対象者：アンケートの目的は書面で説明した。回答は無記名自記式とし、郵送により回収して、秘匿と参加の自由意志を尊重した。

表3 回収率

	学 生			訪問対象者			報告会参加者		
	対象数	回収数	回収率(%)	対象数	回収数	回収率(%)	対象数	回収数	回収率(%)
1998年	81	74	91.0	41	37	90.2	11	8	72.7
1999年	71	50	70.4	36	33	91.7	12	10	83.3
2000年	97	81	83.5	46	44	95.7	27	20	74.1
2001年	85	59	69.4	43	34	79.1	24	16	66.7
2002年	83	60	72.3	41	35	85.4	15	6	40.0

V. 結 果

1. 回収率は表3に示した。
2. 学生、訪問対象者に実習終了後に行ったアンケート結果をもとにこの実習の成果を述べる。

1) 学生

学生に実習終了後におこなったアンケートの中から、「①学生の実習に対する満足度」(図2)、「②実習による看護への関心の増加」(図3)、「③実習は役立つか」(図4)の3つの質問に対しての学生の回答を経年的に集計した。いずれにおいても5段階評価で得点の高い5, 4の割合が1999年度の関心の増加を除いて80~90%を占めていた。

さらに、①~③のそれぞれの質問に対しての具体的な記述を見ると、満足度や関心の増加、実習の効果として、「対人関係・コミュニケーション」、「対象理解：身体、心理、社会的統合体として対象を理解する」、「地域の人、高齢者との交流」、「高齢者から学ぶ」、「自己洞察、自己の課題の発見」が共通してあがっていた(表4)。看護への関心では、これらに加えて看護の視点の理解、訪問看護や老人看護への関心を述べていた。

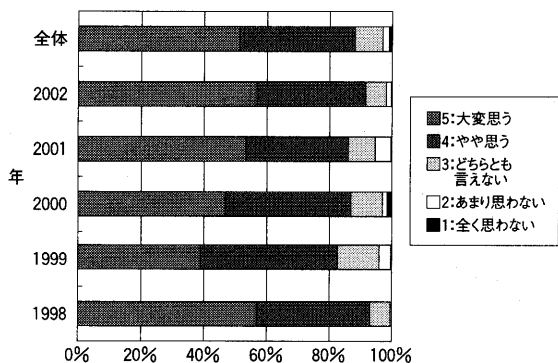


図2 学生の実習に対する満足度

また、実習全体の感想の内容は、主に訪問対象者との間でのふれあい、実習を通して学んだこと、実習に対する不安、学生の今後の目標について述べられていた。実習を通しての学びには、「対人関係」、「コミュニケーション」、「対象者(高齢者)の理解」、「知識、価値観の違い」、「理想(モデル)」「自己を見つめる」に整理できた。特にコミュニケーションについては、具体的なコミュニケーション技術についての内容が述べられていた(表5)。内容としては、①,②,③のアンケートの具体的記述と実習全体の感想の記述には類似点が多かった。

2) 訪問対象者

訪問対象者へ行ったアンケート結果からも実習を受け入れての満足度は、90%以上の人が

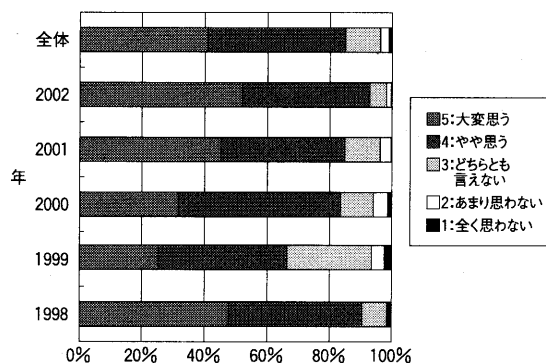


図3 実習を通しての看護への関心の増加

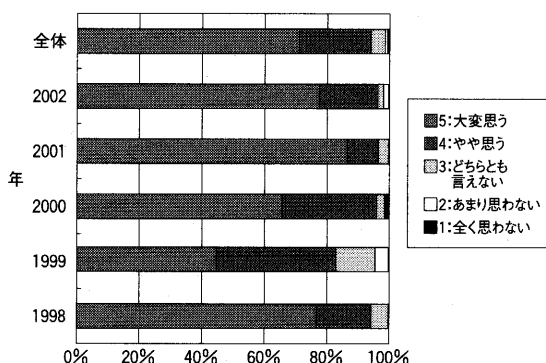


図4 実習は役立つか

表4 ①②③の記述内容

対人関係・コミュニケーション	対人関係	人とのふれあいの大切さやその良さ 人間関係の築き方 人間関係の大変さと楽しさ 人に支えられて生きていると実感
	コミュニケーション	コミュニケーションの難しさと楽しさ コミュニケーションの取り方 年代の違う人とのコミュニケーション
対象理解	看護の立場からの対象理解	多角的な見方 会話の中ででてくるその人らしさを受け止める
	高齢者の理解	考え方、生活観 気持ち 加齢による身体の変化
地域の人、高齢者との交流		地域の理解 地域の人との交流 アットホームな感じ 暖かい、迎えてくれる ふれあいが楽しい
高齢者から学ぶ		人生の体験談 知識や考え方を学ぶ 価値観の違いを理解
自己洞察・自己の課題の発見		コミュニケーションの課題 人の意見を聞くことの大切さ 対象者を通して自分が見えてきた 自分を見つめ直す

表5 実習全体の感想

訪問対象とのふれあい	人とふれあうことのあたたかさ 心に残る、楽しみ 祖母のような感じ 嬉しそうに迎えてくれた
実習を通しての学び	
対人関係	人とかかわることは相互に向き合うこと 人と話すことの大切さや楽しさは知っていると知らないとかとは関係ない
コミュニケーション技術	自己開示、相手への関心、よく聴く、五感を使う、コミュニケーションのステップ 会話の導入・促進、知識の活用、コミュニケーション促進の要素
対象者(高齢者の理解)	高齢者の興味、生活、心情 高齢者の健康に対する関心と生活への反映 考え方は、時代や生活した環境の影響
知識、価値観の違い	年齢による考え方の違い、年代の違う人と話すことは視野を広げる 健康法、家族の大切さ、個人により価値観や考え違う
理想(モデル)	老後のモデル、生き方のモデル
自己をみつめる	高齢者の方が目標を持って生きているのを見て自分も頑張ろうと思った 礼儀や常識的なことがわかっていない自分の幼さがわかった 教養が必要、自分を振りかざることが大切
自己成長	悩んだ分成長した 自分を成長させてくれる
実習に対する不安	実習に対する緊張、失礼のない対応ができるか 全然知らない人と話ができるか、話しが続くか、学生だけの訪問
今後の目標	命の重み・人のありがたさがわかるように、相手の人を受け入れることが大切 相手の理解と会話を大切にすると看護師になりたい、生きたコミュニケーション

「良かった」を選択していた(図5)。訪問を受けて良かった点としては、選択肢を示し、回答を得ているが、結果は図6の通りであった。「看護学生の勉強に協力できた」、「学生の態度がよかった」ことについて高かった。反対に悪かった点として選ばれた点は、「意味が感じられない」、「気疲れした」、「時間をとられた」、「学生の言葉づかいや態度」があったが、毎年、全部合わせても1~3人の選択のみであった。また、実習に対する訪問対象者の意見・要望の自由記述からみると、「地域の高齢者が若い学生と交流がもてることは楽しい、継続して欲しい」、

「訪問が楽しみ」などの交流することを楽しみや親しみを感じたという記述、「世代の違いによる価値観の学習になる」、「双方の人生観の理解になる」などの相互理解に関連する記述、「短大の教育の何かに役立ちたい」、「短大が身近になった」という教育や短大への関心、「学生は素直で親しみやすい」、「礼儀正しい」、「他県の学生には特有の方言や習慣を学ぶ場になった」といった学生に対する記述があった。要望として「会話が進まない」、「何を話題にしたらよいのか」、「学生の質問が少ない」、「マナーを知らない」など学生の対人関係

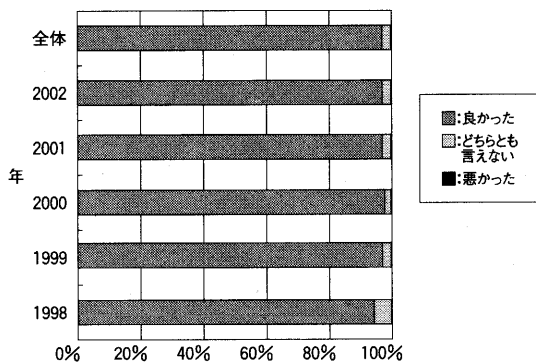


図5 訪問対象者の感想

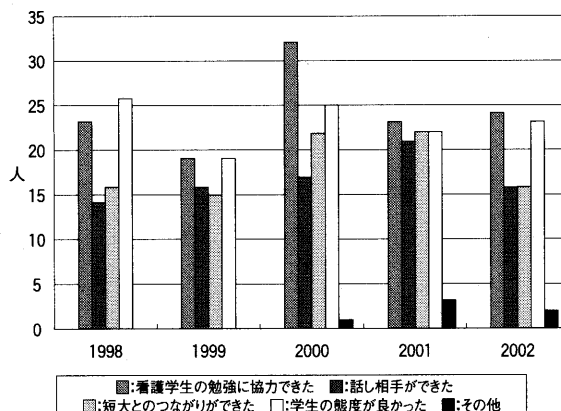


図6 訪問を受けて良かった点

やコミュニケーションの未熟さに関連したことがあがっていた。実習を始めた頃は、「実習のねらいは何か」、「何を望んでいるのか」、「果たして役に立ったのだろうか」といった実習の意義について疑問も寄せられたが、実習の受け入れが高い継続率を示している(表6)ことも関係し、年々そうした疑問は見られなくなってきた。

3) 実習報告会

報告会でこれまでに取りあげたテーマは54題あった。発表したテーマを表7に示す。5つのカテゴリー、「健康」、「人間関係・コミュニケーション」、「生きがい」、「家族」、「高齢者」

に分類できた。一番多かったものが「健康」で19題(35%)、次に「人間関係・コミュニケーション」が13題(24%)、「生きがい」が8題(15%)、「家族」が4題(7%)、「高齢者」の関連したものが2題(4%)であった。内容としては、訪問先で得た事柄を、訪問者間の共通性や個性、あるいは学生と対比し、共通性や個性を分析しながらまとめていた。

1998年以降の訪問対象者の報告会への参加人数は、対象者数約40人に対して、11~27人であった。学生のグループ発表や全体での意見交換では、訪問対象者から率直な意見や学生への期待

表6 訪問先の継続状況

	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年
訪問先軒数	41	42	41	41	37	49	43	42
継続軒数(前年からの継続率)		34(82.9%)	38(90.5%)	34(82.9%)	36(87.8%)	32(86.5%)	39(79.6%)	33(76.7%)
新規軒数	41	8	3	7	1	17	4	9

表7 報告会テーマ一覧(1998年~2002年)

健康	健康法、健康の秘訣 健康に対する意識 高齢者の生活と健康とのかかわり 食事によってもたらされた影響 訪問対象者と学生の健康に対する考え方 長生きの秘訣~健康と生きがい
人間関係・コミュニケーション	世代の違う人とのコミュニケーション 円滑な人間関係を築いていくためには 非言語による情報収集 人を知ること~見て聞いて触れて嗅いで味わって
生きがい	生きがい 生きがいと健康との関わり 充実した生活を送るために生きがいはどんな役割を果たしているか 趣味からみる生きがい
家族	家族と生きがい 家族のふれあい 家族の中の役割 家族とは~家族の役割とその変化
高齢者	高齢者の考え 高齢者の生活背景
その他	よりよく生きるためには 介護への意識 幸せのかたち 楽しく、若く、いきいきと生きる秘訣 活力の泉 地域とのかかわりを持つことの意味

の発言があり、学生からも年々多くの発言が出るようになってきている。

訪問対象者の報告会への参加は、学生にとって、意見交換や訪問時にはわからなかった対象者の思いを理解する場となり、励みになるなどの理由から、緊張や発言のしにくさは感じてはいるがほとんどの学生が良いとしていた(表8)。また、訪問対象者からも、参加した全員が良かったとしていた。参加の動機については、「実習の成果について知りたい」、「学生の受けとめ方を知りたい」という結果に対するものと「訪問を受けた学生の様子が知りたい」、「若い人と接したい」という学生への親近感からのものが多かった。出席後の感想としては、「家庭訪問に協力した意義が見いだせた」、「学生の家庭訪問実習での学びがわかった」、「短大とのつながりが深まった」が多かった(表9)。

Ⅵ. 考 察

看護の対象を生活者として理解することを目的とした地域での家庭訪問実習は、学生の実習後のアンケート結果からは高い評価を得ていた。実習に対しての満足感、看護への関心の増加や実習の有効感についての具体的な記述から理由をみると「対象理解」、「対人関係・コミュニケーション」、「自己洞察・自己の課題の発見」について学びあったが、これらのことは実習の目標としたところと一致する。特に、対人関係・コミュニケーションについての記述は多く、援助関係の基礎である対象との信頼関係確立に関する学びが多く見られている。対人関係、コミュニケーションについての困難さや重要性について気づき、自分をふりかえり、今後の課題の発見につながったと言える。また、この実習の目

的とする生活者としての対象理解では、対象者との相互作用の中で見聞きしたその人の生活の現状、生活習慣や生活信条を通して自分とは違う生活や価値観を知ることで、考え方や生活観、その人らしさなどを理解している。下村ら⁵⁾は、看護職者は、対象者との相互作用の中で『その人の生活そのものの事実』と『その人にとっての意味』を健康との関連から捉えることの重要性を指摘している。患者のQOLを守るためには、患者の価値観や信条を尊重し個別的なかわりが必要である。この実習では、自分と違う生活を知り、生活者の理解が促進されている。今後、援助の実際の場面で、生活者としての個別情報をどのように関連づけていけるかについて、常に意識して指導していくことが必要である。

一方で、「地域の人、高齢者との交流」、「高齢者から学ぶ」、「知識や価値観の違い」、「理想(モデル)」という項目については、この実習が地域の中で、比較的健康な高齢者を対象として行ったことによる成果であると考え。地域の家庭に入って、初対面の年代の違う人と話していく実習は、学生にとって大きな不安を伴う。

表8 報告会への訪問対象者の参加について学生の反応

	1998年 n =	1999年 50	2000年 81	2001年 59	2002年 60
参加の是非					
よい	68	44	79	59	58
悪い	0	0	0	0	0
どちらとも言えない	4	6	1	0	0
緊張したか					
はい	40	28	50	41	36
いいえ	31	22	30	18	24
自分の考えが述べにくい					
はい	29	19	22	32	14
いいえ	49	31	58	27	45
意見交換ができ、参考になった					
はい	68	44	79	56	59
いいえ	1	3	1	3	0
励みになった					
はい	68	42	79	53	57
いいえ	2	6	0	1	2
対象者の思いが理解できた					
はい	69	46	80	56	59
いいえ	0	1	1	2	1

表9 訪問対象者の報告会出席後の感想

	1998年 n =	1999年 10	2000年 20	2001年 16	2002年 6
学生の家庭訪問実習での学びがわかった	6	8	17	11	4
家庭訪問に協力した意義が見いだせた	7	7	16	13	6
大学内での授業の様子がわかった	0	0	5	4	2
短大とのつながりが深まった	6	2	13	9	4
訪問時に感じたことを、報告会で学生達に伝える事が出来て良かった	2	4	1	7	1
看護教育への興味・関心が深まった	3	3	7	8	3
家庭訪問実習とは違う学生の一面を知る事が出来た	4	5	7	7	5
その他				4	1

学生の傾向として、違う年代の人とふれあう体験は減少してきている。また一方では、現代若者気質として表層的つきあいを好み、人の心の中に入ることを避ける傾向が見られる⁶⁾。そうした学生の状況や不安に対して、地域の人々にあたたかい態度や行動で迎えてもらえたことは、初めての実習で緊張している学生の気持ちをほぐし、経験や知識の豊富な年代の人と接することで得られる楽しさや学ぶものの多さを体験的に学習できたことが考えられる。訪問対象者の人生観、生活の知恵、社会生活上での常識などを直接高齢者から学び、今後の学習をする上での基本的動機づけとなっている。地域住民、とりわけ、高齢者の人生の先達者としての教育力は、学生の看護観や人間観を豊かにすることに寄与している。また、自分で不安を乗り越えていったことで学生にとって、自信やさらなる学習意欲を持つことにつながるのではないかと考える。

一方、地域の訪問対象者にも高い評価を得ている。アンケートの結果からみると、学生との交流の機会を実習という形で提供したことは、社会のために何か役立ちたいという思いを看護教育に協力するという形で実現できる役割の達成感、学生との会話が生活への刺激となる、また現在の若者を理解する助けになっていると言える。訪問対象者の中には、学生の訪問が自己の人生をふりかえるきっかけとなっている人もある。高齢者にとって、人生の総まとめとしての統合に際して、自分史や人生で得た価値観を若い世代に伝えることで、高齢者の喪失経験によって起こってくる様々な不適応状態を適応に導くことにも関与していると考え⁷⁾。

また教育に参加することで、住民の大学教育に対する理解が深まり、地域が大学を身近な存在と受けとめ、交流を促進することに寄与していると言える。

報告会はグループ毎の発表、実習全体を通しての意見交換を行っているが、学生にとって、この報告会は、目的とする疑問点等について追求し、視野を広げるだけでなく、その場に、地域の訪問対象者も同席し、堂々と意見を出される対象者に接することや意見交換を行なうことで、

高齢者の多角的な理解や看護への動機づけになっている。また、訪問では、個別のことしかわからなかったことが、他の学生や地域の人から別の見方や考え方があることを学んでいる。一方、参加した訪問対象者は、実習で何を学んでいるのか、成果はどうかということを確認でき、協力したことの意義をフィードバックでき、教育への理解を促進している。個別的な関係だけでなく、集団の中で、意見交換するといった場を設けることで、学生、地域の対象者共に責任感や達成感を感じ、それぞれのなかで、整理する機会となっている。教員の立場からみると、大学教育についての理解や学生への親近感をもってもらえ、教育への協力を得やすくしている。

4回の家庭訪問、カンファレンス、報告会で構成されるこの実習は、地域との連携を通して学生の人間関係、コミュニケーション能力の向上、看護の対象の理解促進、高齢者の生きがいづくり、若者の人間教育にもつながっていると考える(図7)。

現在のところ、実習の評価としては、学生による実習評価、訪問先の方による評価をアンケートによって行っているが、実習の成果を客観的に評価することにおいては不十分である。今後、実習の成果の評価として、実習の前後において、学生の知識や技術、意識がどのように変化したのかを評価していく必要がある。また、訪問対象者への影響についても調査していくことが必要であると考えている。また、生活者としての対象理解を個別的な看護実践に結びつけていけるように、この実習と他の看護実習との連携について検討していくことが重要であると考えている。

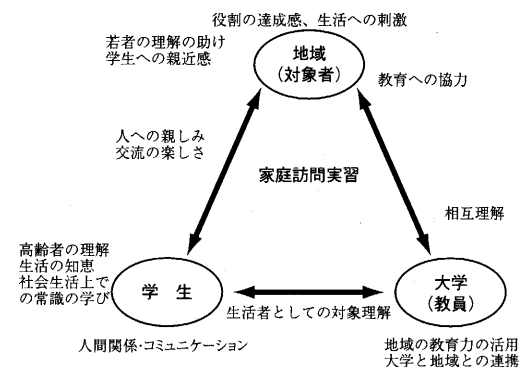


図7 家庭訪問実習の成果

Ⅶ. 結 論

1998年～2002年の基礎看護実習Ⅰの実習終了後に行った学生、訪問対象者へのアンケート結果から地域と連携して行っている本実習の成果を分析した。

その結果、学生、訪問対象者ともに実習の満足度は高かった。

学生の成果は、実習目標の到達に加え、人生観、生活の知恵、社会生活上での常識などを直接高齢者から学び、今後の学習をする上での動機づけになっていた。

訪問対象者の成果は、看護教育への参加によって社会の役に立ちたいという高齢者の役割の達成や生活への刺激、若者への親近感や理解の助けにつながっていた。

訪問対象者も参加した実習報告会は、学生、訪問対象者ともに実習で得られた成果を促進させていた。

以上のことから看護教育に地域の教育力を活用することの意義が示唆された。

引用文献

- 1) 吉川洋子, 長崎雅子, 曾田陽子他: 基礎看護実習における生活者としての対象理解—「全体像」の分析を通して—, 第29回日本看護学会論文集—看護教育—, 100—102, 1998.
- 2) 長崎雅子, 吉川洋子, 曾田陽子他: 家庭訪問実習の満足度の要因分析—学生と訪問対象者のアンケート調査より—, 島根県立看護短期大学紀要, 5, 35—40, 2000.
- 3) 平木民子, 大本真由美: 地域住民への訪問実習における学生の体験記述の特徴—基礎看護実習Ⅰの実習記録から—, 日本赤十字広島看護大学紀要, 2, 23—32, 2002.
- 4) 外村由美子, 赤塚隆子: 地域で生活している人を対象にした基礎看護実習の考察, 看護展望, 26(3), 105—110, 2001.
- 5) 下村裕子, 河口てる子, 林優子他: 看護が捉える「生活者」の視点 対象者理解と行動変容の「かぎ」, 看護研究, 36(3), 25—37, 2003.
- 6) 辻大介: 若者におけるコミュニケーション洋式変化, 若者語のポストモダニティ, 東京大学社会情報研究所紀要, 51, 42—61, 1996.
- 7) 菅沼真樹: 老年期の自己開示と自尊感情, 教育心理学研究, 45(4), 12—21, 1997.

Benefits of the Basic Nursing Practicum Based on the Collaborative Relationship Between the College and Nearby Community

Yoko YOSHIKAWA, Yoko SOTA, Masako NAGASAKI and Yukihiro KIMURA

Abstract

The purpose of this study was to identify the benefits of the nursing practicum comprised of home-visitations in the nearby residential community. Analysis of the responses from participants showed the following:

1) Participants were satisfied with the practicum. 2) Students learned the various philosophies of the residents, common-sense matters etc. 3) Residents were satisfied with association with young students and their participation in educational activities. 4) The interaction added to the benefits of the practicum. 5) This study suggests that the educational effect of the residents is beneficial to nursing education.

Key Words and Phrases : Basic Nursing Practicum, Benefits of the Nursing Practicum, Home-visitation Practicum, Collaborative Relationship between the College and Nearby Community, Educational Effect of Residents